

日記という記録

本年度の秋季企画展では、流行病はやりやまと売薬を取りあげます。「近江国に本宅を置いて、他国稼ぎをした商人」である近江商人は、近江の本宅と出店とで常に書状（書簡）や人を通して情報をやりとりしていました。その多種多様な情報には直接、商売に関わることだけでなく、流行病や自然災害など広範囲に影響を与える出来事に関する情報も含まれていました。また当主本人も本宅から出店に向いたため、種々の出来事を道中で自ら見聞することもありました。そうした見聞は日記という形で記録されています。

書状（書簡）や日記という文献資料、とくに近世以前のもので日本の古文書学においては、「古文書」と「古記録」とに分類します。「古文書」とは、特定の人（々）が別の特定の人（々）に対して意志表示を行うものとされます。つまり、「古文書」には差出人と受取人、用件、日付が通常、備えられています。近江商人が本宅と出店とのあいだでやりとりした書状は「古文書」にあたりません。たほう「古記録」とは、「古文書」とは異なり、明確な受取人がいないものとなります。旅の道中の出来事を記した日記は「古記録」ということとなります。

日記は、日々、身の回りで起こったことが淡々と記される記録

です。日付とともに、書き手のもとに訪れた人、書き手が訪れた場所や人、書き手やその周辺の人々に起こったことや見聞したことが、後にさまざまな人に参照されうる形で記録されていきます。近世以前の日記には朝廷や幕府・藩などに職をもつ人々（Ⅱ公人）がその職務にかんして記録した「公日記」と、それら以外の人々（Ⅱ私人）が残した「私日記」とがあります。近江商人やその使用人が書いた日記や日誌は、その商売に関連した記録ではありませんが、「私日記」となります。

私人の日常身の記録である「私日記」には、時として個人の範囲を大きく超えた出来事Ⅱ非日常が活写されることがあります。今回の展示でご覧いただく日記にも、流行病の様子が自らや身近な人々の出来事として具体的に記されています。その記録はあくまでも、ある時、ある場所に生きた書き手やその周辺に起こった、プライベートな出来事、もしくは出来事の見聞や伝聞なのですが、そこからわたしたちはパブリックな出来事の具体相を知ることになるのです。

（史料館長 坂野鉄也）

二〇二一年度（令和三年）企画展

「近江から見る流行病と近江の薬」

期 間…一〇月一日（月）～十一月二日（金）

休館日…土・日・祝日 祝日館（ただし、一〇月二三日（土）は開館）

開館時間…九時三〇分～一六時三〇分 予約優先制

関連講演会

「幕末・維新期のコレラ流行と地域社会」

東北芸術工科大学歴史学准教授 竹原万雄氏

開催日時…十一月六日（土）一三時から ライブ配信

◎観覧予約及び講演ライブ配信の詳細は、当館ホームページをご覧ください。

ばつくとつちびすと その四九

企業史料の未来

実証を重視する経済史や経営史の研究にとって、史料の重要性は言うまでもありません。史料が豊富にあれば、研究が豊かになる可能性を大きくするし、逆に史料が枯渇すれば研究自体が立ちいかなくなることは容易に想像できます。その際、一般に中世や近世と比べて近代以降は史料が豊富であると考えられています。そうした状況が今後も続くのかどうか、という点を以下では考えてみたいと思います。なお、史料館が体系的に収集・整理している近代以降の企業史料と絡めて考えたいので、以下では企業の内部史料に限定してお話を進めさせていただきます。

日本の近代以降の企業史料を考える場合、ビジネスアーカイブズに関わる組織が比較的未整備である割に史料自体は豊富であると言えるのではないだろうか。その背景として、いわゆる「社史大国」と言われるほどの社史文化の存在が指摘できます。企業にとって、非現用となった社内史料を保存して整理するには、史料の保存場所や整理の要員の確保などコストが発生しますので、敢えて過去の記録を残すには「残すだけの理由」が必要となります。その大きな理由が「将来の社史の執筆にとって必要だから」というものでした。実際、日本の社史の刊行点数は一九八〇年代後半にかけて急増していききました。経営史家の中川敬一郎は一九八六年に「我が国は社史の刊行点数においてだけでなく、その内容の信憑性においても世界の最高水準にある」と述べています。大企業を中心に進められた社史執筆を契機とした社内史料の整理が、

日本の近代以降の企業史料の整理・保存に果たした役割は非常に大きかったと言えるでしょう。

しかし現在、日本はかつての「社史大国」と言われた時代から大きく変化しつつあります。社史の刊行点数は一九九〇年代にピークを迎え、近年は量・質ともに急激に空疎化してきています。転機となったのは経済環境の変化です。一九九〇年代後半の銀行危機を契機に日本経済が構造的な問題に直面し、日本の企業システム自体の見直しが進んで企業再編や事業改革が進められるなかで、社史文化自体が徐々に後退していききました。経営史家の宮本又郎は二〇〇八年に「(社史は)近年、刊行数が減少していることに加え、質的にも：本格的で重厚な社史は減って、やや「お手軽」ともいえる社史が増えている」と述べています。つまり、企業にとって、人やお金を使ってまで過去の記録を残そうとする「理由」が薄れてきているのです。

具体的にイメージしやすい例として金融機関の社史を取り上げてみましょう。表は、経済史・経営史研究者を中心に組織された優秀会社史賞選考委員会が一九七〇年代末から二〇一〇年代にかけて、①選考対象とした社史の数と、②受賞対象の候補作に選ばれた金融系社史の数を示しています。実は、一九八〇年代初頭には銀行、保険、証券などの業種と、そのほかの一般産業に属する会社史の間で質の差が大きな問題になっていました。それは金融関連業種の会社史の水準が他の産業に比して一般的に高く、受賞対象業種が偏ってしまう事態が発生していたからです。その結果、一九九〇年代にかけて金融関連業種の社史は他の業種に比して相対的に厳しく選考するというルールが存在していました。しかし、金融機関社

史のそうした特殊ルールは二〇〇〇年代以降、成立しなくなり、むしろ他業種よりも相対的に低い水準、もしくは刊行そのものが減少することとなりました

しかし、二〇〇〇年代以降も仮に社史文化が健在であったとしても、やはり日本の企業史料の未来は明るくならなかったかもしれません。その大きな理由がデジタル化です。デジタル化は日本経済の今後を占う重要なトピックですが、企業史料の未来にとっても大きな構造転換を強いることになりました。現在、企業で作成される史料の多くが紙ではなくデジタルに変わってきています。かつて社員に配られていた社内報も今やイントラネット上で社員がいつでも自由に閲覧できるようになりました

た。しかし、デジタルの記録は量も膨大なうえ、何度も上書きされることもあり、管理が難しいという特性があります。身近な例に例えると、かつて歴史家の史料調査ではマイクロフィルム撮影機材を担いで、撮影した史料を現像してプリントし、製本したりしていましたが、今ではデジタルカメラやスキャナでの史料撮影が一般的です。一度にたくさん史料を撮影

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
年次	1978	1980	1982	1984	1986	1988	1990	1992	1994	1996	1998
金融	12	8	9	5	2	2	2	2	3	4	2
候補中比率	24%	27%	47%	24%	10%	10%	13%	13%	30%	25%	18%
対象社史点数	430	166	181	180	250	204	193	332	250	230	339
回数	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
年次	2000	2002	2004	2006	2008	2010	2012	2014	2016	2018	
金融	4	0	4	1	0	2	2	2	1	1	
候補中比率	36%	0%	27%	10%	0%	14%	15%	25%	8%	9%	
対象社史点数	274	201	238	187	171	126	137	91	58	93	

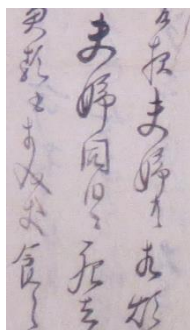
▲金融関連業種の優秀会社史賞の動向

できますが、たくさん撮った史料画像はメタデータを付けて整理しなければ、何万枚も画像があるけど「あれ、何を撮ったわけ？」みたいなことになりかねません。デジタルデータの保存に関しても、企業が刊行していた会社案内を保存する場合と、日々更新されるホームページのデータを保存する場合とを比較すれば、その難しさは容易に想像できるでしょう。つまり、現在は企業にとって、「史料を残す理由」が薄れてきている状況下に「史料を残す方法の難しさ」が加わってしまったのです。

史料館が数多くの近代以降の企業史料を保存・整理して公開することの意義は何かを考える上で、こうした現在の企業を取り巻く史料状況を理解しておくことは極めて重要だと思います。なぜなら、残された史料を通じて得られた学術的成果が、企業や社会に対して「史料を残す理由」を訴えかけていく一つの重要な材料になると考えるからです。

(附属史料館客員研究員 大島久幸)

古今当在



幕末のコレラ流行とある夫婦の死について

日野商人・中井源左衛門家では、仙台藩から領内で集めた米を江戸へ輸送して一手に販売することを任せられ、安政六年（一八五九）に深川（東京都江東区）の仙台藩蔵屋敷の会所に数名の奉公人を配置しました。その一人が水野宇兵衛です。翌年に中井家はこうした立場を失いますが、それ以降も水野は中井家が深川に設けた店で活動し続けたようです。

水野は江戸から日野の中井本家に宛てて数多くの書状を送っており、そこには文久二年（一八六二）以降の麻疹やコレラ流行に言及したのも含まれます。企画展ではこうした書状を二通展示しましたが、さらにもう一通紹介します（画像は書状の一部）。

この書状には、日付が「八月四日」とだけ記され、本文中には「上様御帰城後、世間穏やかにて」との一文があります。「上様御帰城」とは、文久三年三月に上洛した一四代将軍徳川家茂が同年六月に江戸へ戻ったことを指すので、水野が書状を作成したのも同年八月四日と見てよいでしょう。

この書状によれば、深川の店に勤めていた夫婦がコレラで亡くなったようです。以下、現代語訳を示します。

私（水野）の店内で、七月二五日の夜に夫婦である男女がそろって流行病（コレラ）に罹りました。一人は翌朝にもう一人はその夜の五ツ頃（二〇時頃）に亡くなりました。夫

婦が同じ日に死去したのです。夫は私と同じ年齢で、いつも健康に気を使い、夏場は魚類をなるべく食さず、日々灸治などもしていました。もつとも、行いがよい者であっても、寿命の長さは別物であるようです。私は健康を意に介さずに来ましたが、今日まで無事生き永らえました。しかしながら同じ年齢の者が亡くなったのは、隣の家まで火災が及んだ気分です、とても力を落としてしまいました…

人の命のはかなさを感じたのか、水野は「何時にても閻魔の使者が来て、差し支えこれ無き様仕りたき覚悟」——いつ閻魔王の使者が来ても問題ないようにしたい覚悟です——と書状に記しています。もつともこれに続けて、「下拙仕出し置き候貸金の一条は、命これ有る内は急度相片付け申すべく候」——私がしでかした「貸金一条（商売上の貸付金をめぐる揉め事）」は、命ある間にはきつと解決します——とも述べており、商人の意地は衰えていなかったようです。

（専任教員 青柳周二）

二〇二一年四月から二〇二一年九月までの史料館の動き

◇展示

令和三年度春季展示（オンラインで公開）

「読 調 整 覧」史料館のしごと

五月二七日（木）～七月二二日（木）

◇整理

・ 仲屋町元共有文書【近江八幡市】

・ 奥野文雄家文書（後発見分）【彦根市】

発行 滋賀大学経済学部附属史料館
TEL 0746-27-1040 <https://www.econ.shiga-u.ac.jp/shiryō>